

# 家計管理・生活設計のツボ

## 第7回

### 「資産形成」のための基本的な考え方

「そろそろ将来に向けて資産を蓄えていこうかな」と漠然と考えてはいても、何から始めて良いか分からないという人も多いのではないのでしょうか。今回は、社会人を主な対象に、資産形成にあたって押さえておきたいポイントを紹介합니다。

- ツボ1** 資産形成をめざすなら、まずライフプランを立てよう
- ツボ2** お金を運用する前に自分の「リスク許容度」を把握しよう
- ツボ3** 金融商品は「安全性」「流動性」「収益性」の基準で見極める

#### ライフプランの中で資産形成を考える

資産形成というと、「どうやって」お金を貯めようか、増やそうかといった方法論に目が向かいがちです。ただ、まず考えてもらいたいのは、今後の人生で、いつごろ、どのくらいのお金が必要になるのかということです。一般に「人生の3大資金」といわれる「子どもの教育資金」、「住宅取得資金」、「老後資金」など、特定の目的のために用意するお金、加えて病気や災害などの将来の不確実性に備えて準備しておくお金についても考えておきましょう。

これはライフプランを立てることにはかなりません。結婚や子どもの誕生・進学、マイホームや車の購入など、中期の夢や希望とそれを実現するための必要資金を考え、これらを各年齢での収入とともに書き出して「ライフプラン表(注)」を作成してみましよう。もちろん、ライフスタイルは人によってさまざま。自分ならではの「ライフプラン表」を作成することによって、必要資金をいつまでにどう準備していくか(＝資金計画)を具体的に考えることができます。

表1 金融商品の特性を知るための3つの基準

<b>安全性</b>	預けたお金が目減りしたり、予想外の損をする可能性はないか？	<ul style="list-style-type: none"> <li>・金融商品から生ずる利益が変動するか</li> <li>・金融商品自体の価格や価値が変動するか</li> <li>・債券・株式等の発行体の経営は健全か</li> <li>・取扱い金融機関の経営は健全か、破綻に備えた保護の仕組みが設けられているか</li> </ul>
<b>流動性</b>	どのくらい自由に現金に換えられるか？	<ul style="list-style-type: none"> <li>・満期や据置期間があるならどれくらいの期間か</li> <li>・中途解約ができるか</li> <li>・換金手続きはスムーズか</li> <li>・売りたいのに買い手がみつからないということはないか</li> <li>・取扱い金融機関は利用しやすいか</li> </ul>
<b>収益性</b>	どのくらいの運用利益が見込めるか？	<ul style="list-style-type: none"> <li>・どのくらいの利回りが見込めるか</li> <li>・どのくらいの値上がり利益が見込めるか</li> </ul>

(出典) 金融広報中央委員会「金融商品なんでも百科27・28年用」

#### 「リスクとリターン」の関係を理解する

将来必要になると見込まれるお金を計画的に準備する場合には、そのお金の価値が目減りしないようにすることや増やすということも考える必要があります。お金の運用について考えてみましょう。

まず、お金の運用を始める前に理解しておきたいのが「リターン」(お金を運用した結果、得られる利益のこと)と「リスク」(リターンの不確実性の大きさや損失が発生する可能性のこと)についての関係です。

- ハイリスク・ハイリターン
- ローリスク・ローリターン

これは、高いリターンを得ようとするれば高いリスクを伴い、リスクを低く抑えようとするればリターンも低くなるということを意味します。ただし、リスクを高めれば必ず高いリターンが得られるわけではないことに留意してください。

#### 自分のリスク許容度を理解する

「リスクとリターンの関係」から、リスクを全く取らなければ

(注) ライフプラン表の作成については本コーナー第2回「未来を描こう！家族のライフプラン30年」(2014年秋号)を参照。また、本誌20-21ページで紹介する「家計夢ノート」でもライフプラン表のひな形を掲載しています。

表2 主な金融商品の性格

基準 金融商品の種類		安全性	流動性	収益性
預金		高い (注1)	高い	低い
債券	国債	高い	高い (注2)	一般に預金よりも 高い (注3)
	社債	発行企業次第	社債によって異なる	一般に預金よりも 高い (注3)
株式		総じて低い (発行企業次第)	株式によって異なる	総じて高い (発行企業次第)
投資信託		投資信託の内容によって異なる		

(注1) 1行あたり、元本1000万円までとその利息が預金保険で保護される  
 (注2) ただし、個人向け国債は発行後1年間は、原則として中途換金ができない  
 (注3) 満期前に売却する場合には元本割れになる可能性もある

ターンも得られないということが分かります。では、資産形成を行ううえで、どの程度のリスクを取ってどの程度のリターンを目指すのかについて、いったいどう考えれば良いのでしょうか。

ここで必要になるのが、「リスク許容度」の考え方です。リスク許容度とは、その人がどこまでリスクを取ることができるか(許容できるか)、その限度を示すものです。例えば、あなたが300万円を持っていて、株式投資を始めようと考えているとしましょう。ただ、このうち250万円は、先行きの生活費にあてる必要があるとします。このとき、あなたは50万円以上の損失は許容できないと考えるでしょう。すなわち、この

場合、あなたの「リスク許容度」は50万円ということになります。リスク許容度は、その人の年齢、収入、家族構成、また投資に対する考え方などによっても異なります。例えば、あなたが「株式投資で1年間に発生するかもしれない損失は5割を見ておけば十分」と考えたとすると、先ほどの例では手元に200万円を残し、1年間、「100万円」まで株式に投資することが考えられます。

まず自分のリスク許容度をよく考え、それに見合う形で期待するリターンを勘案しながら資金計画を作っていくことが大切です。逆に言えば、期待するリターンに見合うリスクを取れないのであれば、資金計画自体を見直す必要があるということなのです。

### 金融商品の3つの基準を理解する

お金を運用する、すなわち、預金、債券、株式などの金融商品を選択するにあたっては、金融商品の性格を押さえておくことも重要です。金融商品は、一般に、「安全性」、「流動性」、「収益性」の3つの基準から評価されます。それぞれの内容は表1のとおりですが、この3つの基準すべてにおい

て優れている商品はないということをしつかり理解しておきましょう。とくに、先ほどのリスクとリターンの関係が当てはまり、「安全性」と「収益性」が両立しない(「安全性」が高ければ、「収益性」は低い)点は重要です。

金融商品を選択するときは、この点に留意し、資金の目的に応じて使い分ける、組み合わせるといふ発想が大切です。例えば、そのお金が「当面の生活にあてるお金で絶対に減らせない」のであれば、預金などの安全性の高い商品を選択することが適当です。一方、「当面使われないお金で、老後まで長く運用し、なるべく大きく増やしたい」ものであれば、株式などで収益性を重視することも考えられます(表2参照)。